
隣の王様

尾黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣の王様

【Nコード】

N9179Q

【作者名】

尾黒

【あらすじ】

仕事から帰ると、暖かい我が家。

そして、ご飯を作って待っていてくれる……異世界の王様。会話文のみの、軽すぎる異世界相互トリップな短編。

（前書き）

注意：会話文のみ

「ただいまー。はー、疲れた疲れた。今日も働いたったぜ！」

「おかえり、燕つばめ。寒かっただろう。酷くパンプスが濡れているな。ほら、こちらの新聞紙の上に置いて乾かすがよい。」

「うん、雪が降ってたよー。もう最悪。こんなことならブーツで行くんだった。」

「雪か。道理で寒いと思った。『我が国』とはやはり季節が全く違うのだな。」

「そうだね。……あれ？うちのサヨちゃんは？」

「小夜子母君おんやこから燕へ伝言を預かっているぞ。『今日はアロマの講習会の後に飲み会あるから、ご飯はテキトーに食べてね！メールしようと思ったんだけど充電無くてー。ごめんね！』だそうだ。」

「……いや、家に居るんだったら充電すりゃいいじゃん。」

「うむ。おそらく、面倒だったのだろうな。」

「んなこたわかつちよるわ！ええー。どうしょ。なんかあるかなあ。『テキトー』にビールとつまめるもので済まそうかな。」

「そう言うと思って、私が作っておいた。納豆チャーハンだ。それと、セロリとベーコンのコンソメスープに、サラダ。最近便秘気味だと言っていただろう。繊維質を摂るといいらしい。テレビで言っていた。」

「おおおおー！私が好きなレシピの、ゴマ入りにんにく入りの納豆チャーハンじゃない！あれ、しかも、このドレッシング、市販のヤツじゃないじゃん。すごい！これもつくったの？……………」

ん？でも、このサラダ、見たこと無い野菜が……………」

「サラダは、お前の食生活を心配したうちのコック長が持たせてくれた。便秘にいいらしい。」

「食事前に便秘便秘連呼するな！食べたなら即座に出さなきゃいけないみたいじゃないのよ。」

「お前も淑女としてあけっぴろげすぎる所があるぞ。気をつけよ。」

「じゃあ、言いますけどね。一国の王様ともあろうアンタが！納豆チャーハンとか作って待ってるんじゃないっつの！！お前は私のできた嫁か！！食べるけど！！！！」

「政務の合間に、今度は小夜子母君から肉じゃがを習おうと思っておる。次も期待しておくがよい。」

「どこへ向かうとしてんの、アンタ。マジで。」

「我がイリグリア国を平和で住み良い国にするため、定めた理想に向かっているが、何か。」

「最後のひとネタが余計なんですけど。台無しなんですけど。ていうか、それに肉じゃがをどう生かすの。」

「私の精神安定と言う名の趣味に。」

「所帯くさい！！ダプター宰相が泣くわ！！！」

「泣くがよい。私には関係ないわ。……おお、燕よ。そろそろ金曜□ードショーが始まる頃合だ。今月はジブリ月間だからな見逃せん。」

「着々と染まってるわね、日本の生活に。私、宰相に暗殺されないかな。」

「食べながらでいいから、早く来い、燕！オープニングがはじまってるしまったぞ！」

「はいはい。って、ちょっと、鏡の向こうで、ダプターさんが号泣してんだけど。エキゾチックイケメンが台無しになってるわよ。もったいない。何でこっちに来ないの？」

「今日は『向こう』に次郎父君が日本酒を持って宴会をしに行っているからな。『こちら』へは来ずに次郎父君の世話をせよ、と、頼んでおいたのだ。すぐにダプターも回収されるだろう。」

「あ。ホントだ。大爆笑してるホワイト將軍と号泣してるブラック將軍に担がれて行っちゃった。もしかして、宴会場から逃げてきたのかな。將軍二人もだけど、野次馬たちの雰囲気も怪しかったわよ。何時から飲んだらあんなにべろんべろんになるわけ？」

「次郎父君が鏡を通して『向こう』に行ったのは、確か日が落ちる前だった。」

「おい！日本は冬ですよ！今！！日が落ちるの早いですよ！！」

「もうよかるう。ほら、今日はトト□だぞ。ネコバスを見逃しているのか？」

「ネコバスはまだ出てこないわよ。……はあ。まあ、いつか。あ、こらっ！！ゲオルグ！そんな近くでテレビ見るんじゃない！！」

「トト□……我が国にも住んでおればよいのにな……」

「『向こう』ってファンタジーまっしぐらな世界だから、探せば居るんじゃない？ん。サラダ、美味しいな。ドレッシング譲ってもらえないかなあ。」

「戻り次第、搜索隊を編成して……」

「税金の無駄遣い、ダメ、絶対。」

「駄目か……」

「駄目。」

「そうか……」

「……明日は休みだから、遊びに行っちゃる。それで我慢

しなさいよ。」

「うむ。……………それで許す。」

「上から目線な返答、いただきましたー。」

「明日は晴れるといいな。」

「『どっち』が?」

「『どちらも』だ。」

「そうね。どっちも晴れるといいわね。……………それはそうと。」

「ん?」

「その割烹着、金髪碧眼のソフトマツチヨには死ぬほど似合わないから早く脱ぎなさいよ。イケメンでも似合わないものつてあるのねー。あ、まっくろくろすけだ。ゲオルグ、ほら、まっくろくろすけ出たよ!ー!」

「……………。燕、お前、酷いぞ……………。これは小夜子母君がだな、」

「ゲオルグ! まっくろくろすけキター!ー!」

「だああ! 聞こえておるわ!ー!」

END

三 条 燕（さんじょう つばめ）

>> 某県某市某地区の築ウン十年の一戸建てに父母と住む、女。販売員。

>> ある日、廊下にある姿見の鏡が異世界の城の鏡と繋がる。

>> いつの間にか半居候と化した異世界の王様とちよくちよく遊んでいる。

>> 両親がいつのまにか異世界の王様と仲がよくなっていることに釈然としない。

ゲオルグ・デミトリクス・イリグリアル・スルト

>> 燕から見て異世界にあたる、イリグリア国王。男。

>> 偶然別世界に繋がった鏡で日本と自国を行き来している。趣味：調理。

>> 自室の隣室（将来の後のための部屋）の大鏡が件の鏡^{くだん}。

>> 鏡の向こうの世界が居心地よすぎてなかなか帰らず、宰相に怒られる日々を送っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9179q/>

隣の王様

2011年2月19日13時22分発行